高齢者の生活機器使用に関する研究

○佐藤 菜生, 今井 景太, 益田 雄司（京都工芸繊維大学大学院）
久保 雅義（京都工芸繊維大学大学院）

A Research of Using the Living machines for Elderly
Nao SATO ,Keita IMAI, Yuji MASUDA(Kyoto Institute of Technology),
Masayoshi KUBO (Kyoto Institute of Technology)

1. はじめに

超高齢社会に突入した日本では高齢者の単独世帯化や認知症高齢者の増加が懸念される¹⁾。また、日常生活動作や判断能力の低下といった理由から、家電製品などの生活機器が次第に使いにくくなることも予想される。そこで本研究では、「高齢者が身の回りにある生活機器を十分に使いこなせているか」という現状を明らかにする。

2. 方法

2.1 調査の方法と概要

高齢者を対象に、5件法による調査票調査をおこなった。詳細は表1に示す。

調査票は2種類あり、①日常生活行動に関する評価、②生活機器使用に関する評価を問う質問項目で構成されている。第1回調査では被験者本人と家族からの指摘の自己申告のみであったが、第2回調査ではより客観性をもたせるため家族からの回答も追加した。

表1 調査の概要

	日時	被験者		調査場所
		年齢	性別	
第1回	2013/ 12/2～4	65～79歳	男性15人 女性13人	京都工芸繊維大学
第2回	2014/ 3月上旬	75～85歳	男性21人 女性19人	シルバー人材センターを通して郵送

2.2 調査票の内容とその目的

①日常生活行動に関する評価

生活行動から、被験者をグループ分けするための質問項目を用意した。山口²⁾の「認知症初期症状11質問表」を用いて、日常生活行動に関する質問票を作成し、5段階で自己評価をおこなった。その結果より、被験者を「非認知症傾向」と「軽

度認知症傾向」の2グループに分類した。

第2回調査ではより客観性を持たせるため、「家族からの評価」として家族からの被験者評価も考慮しグループ分けをおこなった。

②計16の生活機器の「使いやすさ」評価

日常生活機器について、使いやすいかどうかの評価をおこなった。今回は、相良らの研究³⁾で報告されている「使用履歴の高い家電製品等上位20位」を参考にして表2に示す計16の生活機器を取り上げた。これら16の生活機器に対して使用の可否を問い、使用していると回答したものについては5段階で評価する質問票調査をおこなった。

表2 今回の評価対象である日常生活機器

ストーブ	換気扇	照明スイッチ	トースター
電話	温水洗浄便座	電子レンジ	エアコン
コンロ	掃除機	洗濯機	アイロン
風呂場給湯器	炊飯器	冷蔵庫	テレビ

2.3 設定仮説

以下の2点を仮説として設定した。

- (1) 軽度認知症傾向グループの方が、日常生活機器を使いにくいと感じる傾向にある。
- (2) 後期高齢者の方が生活機器を使いにくいと感じる傾向にある。

3. 結果

3.1 第1回調査の結果

自己申告によって認知症傾向をグループ分けした際には、生活機器の使いやすさについて非認知症傾向と認知症傾向グループでは有意な差は見られなかった。

家族の指摘によってグループ分けした場合、テレビ、洗濯機、電子レンジに関して5%水準で有意差が見られ、軽度認知症傾向の方が非認知症傾

向よりも「使いにくい」と感じていることが明らかになった。

3.2 第2回調査の結果

①グループ分けを被験者自身の日常生活行動への評価回答でおこなった場合

電子レンジ、エアコン、掃除機、テレビに関して、軽度認知症傾向グループの方が非認知症傾向グループよりも「使いにくい」と答えた。(図1) しかしマン・ホイットニーのU検定より、温水洗浄便座について5%水準で有意差が見られたのみで、他の生活機器に関して2グループ間に使いやすさによる有意差は見られなかった。

図1 グループ別でみた生活機器に関する評価

②グループ分けを家族による日常生活行動への評価回答でおこなった場合

電話、炊飯器を除くほとんどの機器に関して、非認知症傾向グループの方が軽度認知症傾向グループよりも「使いにくい」と答えた。マン・ホイットニーのU検定より、有意差が見られたのは温水洗浄便座のみ(5%水準)であったが、「使いにくい」と回答したのは非認知症傾向グループの約5%であり、認知症傾向グループでは「どちらでもない」約10%、「使いやすい」約90%であった。

よって、設定仮説(1)「軽度認知症傾向グループの方が、日常生活機器を使いにくいと感じる傾向にある。」に関しては、仮説が棄却された。

3.3 第1回・第2回調査の複合結果

①仮説(2)の検証

仮説(2)「後期高齢者の方が生活機器を使いにくいと感じる傾向にある。」に関して、有意差は見られず、この仮説は棄却された。

②仮説以外に明らかになったこと

第1回および第2回の被験者本人の回答のみを抽出して性別で分析した結果を図2に示す。炊飯器、アイロン、洗濯機、掃除機に関して男性の方が女性よりも「使いにくい」と答えていることが明らかになった。特に洗濯機においては、女性は約90%が「使いやすい」と回答したのに対し、男性は約30%しか「使いやすい」と回答していない。これらの4生活機器に関して、マン・ホイットニーのU検定により1%水準で有意差が見られた。(図2)

図2 性別でみた生活機器に関する評価

4. まとめ

高齢者の生活機器使用の実態に関して、仮説(1)「軽度認知症傾向グループの方が、日常生活機器を使いにくいと感じる傾向にある。」に関しては、一部の生活機器において支持された。

性別による生活機器使用の評価では一部有意差が見られたが、家事参加への経験や姿勢の影響が考えられ、生活機器の使用頻度も考慮する必要がある。

参考文献

- 1) 内閣府 平成25年版高齢社会白書 ; pp2-14, 2013
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/zenbun/25pdf_index.html
- 2) 山口晴保:「認知症の正しい理解と包括的医療・ケアのポイント 快一徹! 脳活性化リハビリテーションで進行を防ごう」; 協同医書出版社, 2010年
- 3) 相良二郎, 見明暢, 田頭章徳, 種村留美, 長尾徹, 野田和恵:「認知力低下に配慮した継続使用が可能な家電製品のデザイン方法に関する研究」; 神戸芸術工科大学紀要 芸術工学2013, 2013年